

伊豆大島の「三原山と椿祭り」 (2019/2/14-15)

T

1. はじめに

伊豆大島の「椿祭り」に行ってきました。4年前に一度計画したのですが、何や彼やで流れてしまい、今回、やっと実行できました。伊豆大島といえば、三原山が噴火(Ref.1)して全島民および観光客を島から緊急脱出させ(Ref.2)、全島民においてはその後1か月にわたって島外避難となった事を思い出します。鮮明に思い出せるのですが、これは1986年(昭和61年)のことでもう30年余りも前のことです。最近では、2013年(平成25年)10月には台風26号に襲われて、観測史上最大の24時間雨量824mmを記録し、土砂災害により元町地区を中心に49名の死者・行方不明者を出したニュースがあります。

一方、都はるみの「アンコ椿は恋の花」から連想する「椿のような思い焦がれる娘さん」がイメージされます。「アンコ」とは伊豆大島で年上の女性に対して親しみを込めてよぶ時の呼称で「姉こ」が変化したもの、広くは「島の娘」のことだそうです。下記がその歌詞です。

1. 三日おくれの 便りをのせて 船が行く行く 波浮(はぶ)港 いくら好きでも あなたは遠い
波の彼方へ 行ったきり アンコ便りは アンコ便りは ああ 片便り
2. 三原山から 吹き出す煙 北へなびけば 思い出す 惚れちゃならない 都の人に
よせる思いが 灯ともえて アンコ椿は アンコ椿は ああ すすり泣き

今回、船やバスのガイドさん、地元のおじさん&おばさん、観光協会、宿屋のパンフレットなどから興味を持った話題について、インターネット情報で補足しながらまとめてみました。また、三原山ハイキングについては、日記調の記録として書いてみました。

Ref.1: 1986年の最新の噴火: 島中央の三原山火口からだけでなく、地面が割れて連なった火口ができる『割れ目噴火』が起きました。

Ref.2: 「NHK プロジェクト X 挑戦者たち」で題材として取り上げられ放送(2002年)されました。「史上最大の脱出作戦 13時間のドラマ ~三原山大噴火 緊急チームの闘い~」(<https://www.dailymotion.com/video/x5jxrwy>)

2. 伊豆大島の基本情報

伊豆大島は東京から南に約120km、伊豆半島東側の沖合約30kmという位置にあります。東京・竹芝客船ターミナルから高速ジェット船(東海汽船)(Ref.3)で、三浦半島にある久里浜(ペリー艦隊の一行が上陸した場所)を経由してわずか65分の乗船時間です。ジェット船は初めての体験。楽しみです。図1は、この時乗ったセブンアイランド虹の写真です。



図1 高速ジェット船(東海汽船):
セブンアイランド虹(全長約27m, 旅客定員254名)
(from <https://www.tokaikisen.co.jp/ourship/jetship/>)

Ref.3：ジェット船は、ジェットエンジンで海水を吹き出し、その海水から揚力（浮き上がる力）を得て飛び「海のジェット機」だそうです。揚力を得ている水中翼が、水中に全て沈む「全没翼型水中翼船」となっており、ハイスピードと高い安定性、なめらかな航行を実現しています。



図2 高速ジェット船（東海汽船）(from <https://www.tokaikisen.co.jp/ourship/jetship/>)

通常的水中翼船は、高速航行時に水中翼の一部が水面上に出る「半没翼型水中翼船」です。全没翼型は半没翼型と比較して安定性に劣るとされています。これは、「半没翼型の場合は特に水中翼の制御をしなくてもある程度の振動を伴いつつではあるが安定した浮上がなされるのに対し、全没翼型ではそのような自律的フィードバックが期待できないこと」、「半没翼型に設けられている水中翼には大きな上反角が付けられ、横揺れに対する復元力が確保されていること」に依っています。但し、近年ではコンピュータによる水中翼の能動的な制御技術が確立されたことにより、全没翼型でも安定性を確保できるようになりました。(from ウィキペディア：水中翼船)

今回の航路でも、時速 70-80 km 余りと確かに高速で、うたい文句通り「揺れ」はほとんどありません。快適でした。船が加速を続け、一定のスピードを超えると船は浮き上がって「離水」し、完全に海面から離れた翼走状態に入ります。この離水をテイクオフ (take-off)、着水をランディング (landing) と飛行機の離陸と着陸と同じ英語表現アナウンスしていたのが新鮮でした。

航行開始前に乗務員によるシートベルト着用の視認チェックがありました。また、低速航行中および離水時&着水時にはシートベルト着用が求められており、化粧室・自動販売機の利用ができません。高速航行になれば、これが解除されます。途中、「イルカや鯨などの大型哺乳動物の回遊区域を通るので減速します」という領域以外は、飛ぶような航行です。



図3 シートベルト着用サイン

約 65 分の乗船を経て、岡田港に入港しました。伊豆大島には、「西の玄関口・元町港」と「北の玄関口・岡田港」の 2 つの港が存在します (図 4 参照)。実は当日の天候などによって 2 つの港を使い分けているのです。入出港がいずれになるかは当日朝に決まります。船の就航率を高めるために採用された「一島二港方式」です。今回の訪島でも帰路の出港は、元町港となりました。

そのため、路線バスにおいて、例えば、三原山ラインの路線図は、「入港地→三原山頂口」、「三原山頂口→出港地」と表示されており、当日朝にならないと入港地 (= 出港地) が岡田港と元町港のどちらになるかは決まらないので注意が必要です。



図4 伊豆大島の観光マップ

(from https://www.tokaikisen.co.jp/tsubaki_festival/assets/img/new_chirashi_64tsubaki.pdf)

伊豆大島は黒い溶岩の島で、その面積は約 90km² で、山手線内の面積の約 1.4 倍あります。海面上に現れたのは2万5千年ぐらい前らしい。若い火山でかつ黒い玄武岩質の溶岩であるが故に、つまりこの玄武岩はとても軽い岩で、岩の中が多孔質になっており、地表の水はけが良くて川がなく、雨水も抜けてしまいます。そのため、大島には恒常の川や湖、沼、池がないのです（図 3 参照）。古来、大島では生活水に乏しく、水は大事に使われてきました。現在では、地下水源を利用した水道があります。電気については、島内に火力発電所があります。

人口は昭和 27 年（1952 年）には 13,000 人を数えましたが、昭和 50 年頃からは減少傾向にあり、現在は約 7,450 人（2018 年 10 月）です。伊豆大島の観光客は、都はるみの歌「ア

ンコ椿は恋の花」(1964 年；昭和 39 年発表)のヒットと旅行ブームという時代背景もあって、昭和 45-48 年の最盛期 77-84 万人から徐々に減ってきて約 1/4 の底打ち(あるいはその出口)状況となり、平成 27 年では約 22 万人になっています。

一方、島には元々いなかった台湾原産のタイワンザル、タイワンリスが大繁殖し、住民を悩ませています。1930 年代半ばに地元の動物園から逃げた群れが野生化したとみられ、長年駆除が進まない間に、サル 20 匹が 4 千匹近くに、リス 30 匹にいたっては数万匹ともはや数えられないほど増えているのだとか。特産品のアシタバやツバキの実などの被害が深刻化しているそうです。

タイワンリスの好物は、島特産のツバキ油の原料となるツバキの実。熟す前の若い実をかじっては、木の下に落とすそうです。ツバキ油を製造する製油所社長に、「リスがいなければ、油の生産量は倍になるはずだ」とまで言われています。また、リスによるツバキなどの樹皮剥ぎも深刻になっています。樹皮といっても、外側の固い部分は食べず、その内側の「形成層」と呼ばれる木の成長のための組織を食べているそうです。形成層には糖やタンパク質が含まれているとのこと。樹皮剥ぎは、鋭い前歯を研ぐためともいわれています。タイワンリスの歯は 1 ヶ月に 2.5mm 伸びるという説があり、この速度は人間の爪が伸びる早さの 2~3 倍ですから、歯を研ぎたくなるのもわからないでもありません。また、繁殖も盛んで、生後約 1 年で始まります。通常は年に 1 回、秋ごろに 1~2 頭を生みますが、えさなどの条件が良ければ年 3 回の繁殖で 4 頭ほどを生むこともあるそうです。

その他、シカ的一种であるキョン(肩高 40-50cm)による被害もあります。1970 年代にやはり動物園から逃げ出して島全域で野生化し、その頭数は住民の数(7,700 人)より多い 13,000 頭とも言われています。やはり、特産品のアシタバを主とした農業被害が深刻さを増しているそうです。私も 2 日間の滞在中に森林の中で道を横切る 1 頭を見かけました。

伊豆大島の歴史は、流刑地から始まります。日本書紀に出て来るそうです。しかし、それよりずっと前の縄文時代、その早期前半の土器、神津島産黒曜石の石鏃(せきぞく・矢じり)、イノシシの頭骨などが海食崖の下部から多数出土し、竪穴住居も確認されています。現在、伊豆諸島では最も古い 8,000 年前の遺跡とされています。

観光バスの運転手さんからのクイズです。「信号機は島内に何か所あるでしょうか?」「交通量が多くないのであまり設置の必要性はないのですが、子供たちが大きくなって都会に出て行った時に困らないようにするために設置しています」とのこと。正解は、7 カ所でした。

3. 地層大切断断面

島の南西側、元町港から波浮港に向かう島一周道路沿いに「地層大切断断面」があります(図 5 参照)。伊豆大島の火山噴火史を物語る地層の大切な断面です。100 層ほど積み重なった見事な縞模様は、過去 1 万 5 千年以上の間に 100~200 年ごとに繰り返し発生した大噴火による降下火砕物が堆積した地層です。スコリア(火山放出物の一種で、黒色で多孔質の岩片)・火山灰・風化火山灰または腐植土の互層になっていて、これらが 1 回の活動期の噴出物です。

大島では“バウムクーヘン”と呼ばれるこの地層は、1953(昭和 28)年道路建設工事中に偶然発見されたもので、長さ 630m、高さ 24m 程に渡って続いています。起伏に富み、一見褶曲のような見かけですが、飛ばされて来た火砕物が地形を覆って降り積もった堆積物なのです。典型的な不整合もみられます。



(a)



(b)

図5 地層大切断断面：100層ほど積み重なった見事な縞模様は、過去1万5千年以上の間に100～200年ごとに繰り返し発生した大噴火による降下火砕物が堆積した地層です。

4. 三原山

伊豆大島は島全体が活火山。その中でも島の中央に位置する『三原山』は、島民に御神火様として崇められてきた、まさにシンボルともいえる山です。三原山頂口（図 6 参照）までバスで行き、その展望台と直ぐ近くの避難所に立ちました。図 7 は避難所から見た三原山（内輪山）です。眼下に広がりを見せるカルデラは、約 1,500～1,700 年前の数回の大噴火で形成されました。



図 6 三原山のトレッキングルート (https://oshima-navi.com/geopark/mihara_trek.html)



図 7 三原山頂口の展望台の横から見たカルデラと三原山（内輪山）：山肌の黒い筋模様は 1986 年当時の噴火で流れ出た溶岩流跡

図 7 において、カルデラ床に鎮座する山が 1777 年の大噴火でできた三原山（中央火口丘；内輪山）です。左側の高まりが剣ガ峰、右端が 1950～1951 年の噴火でできた三原新山 758m で、1986 年の噴火でさらに 6m 高くなり 764m となりました。その後の測量で 2006 年に 758m に書き換えられました。斜面の黒い筋模様は 1986 年の最新噴火でカルデラ内に流出した溶岩流の跡です。この最新噴火が「全島民 1 万人の脱出、1 か月の島外避難」に繋がっていったのです。剣ガ峰近傍のズームアップ写真（図 8 参照）ではたくさんの噴出する水蒸気がはっきりと写っています。火口の周りには、火口一周ハイキングコース：お鉢巡り（砂利道）2.5km、約 45 分が整備されています。薄い白い箇所は、3 日前の寒波による積雪です。めずらしいとのこと。

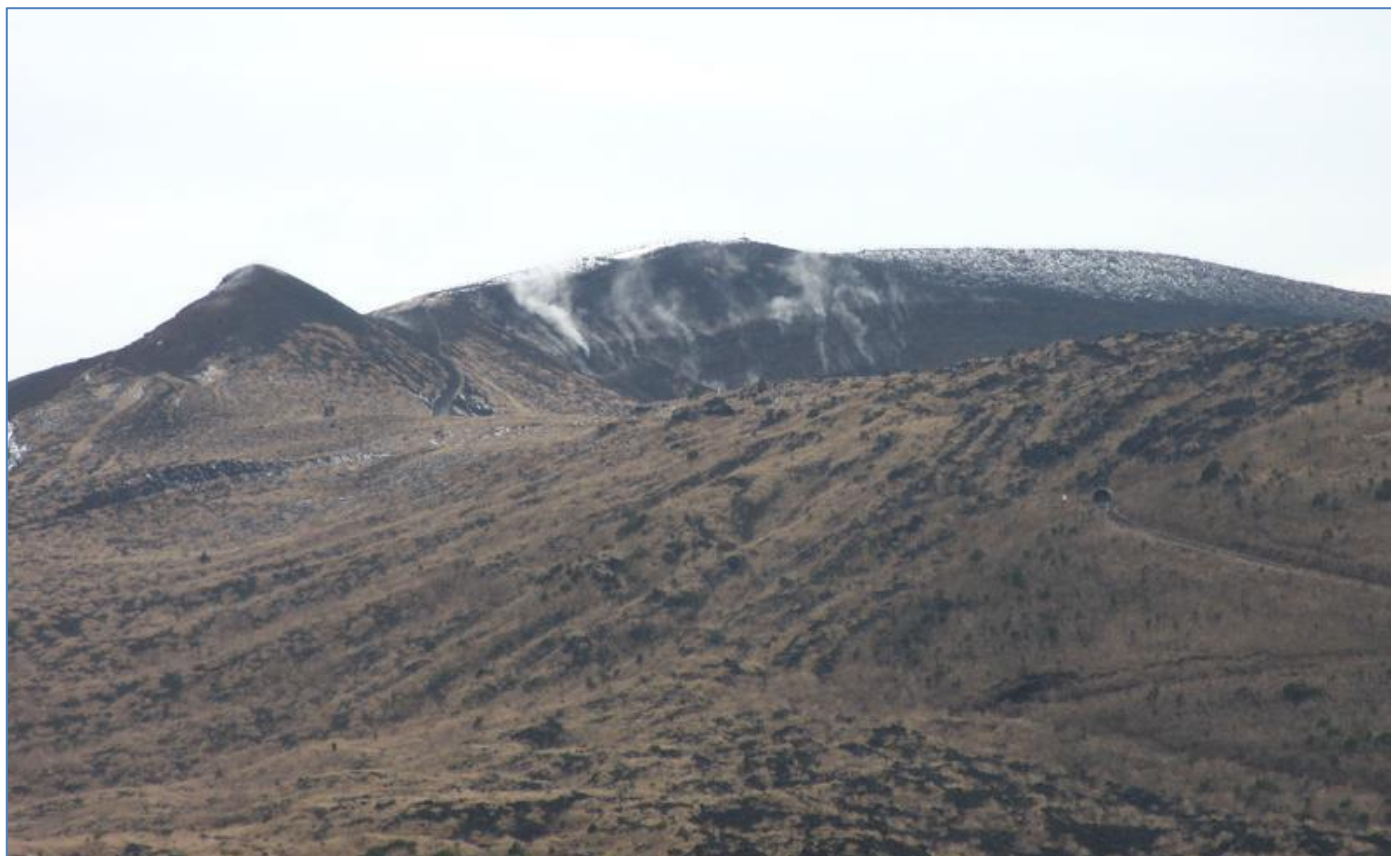


図 8 図 7 の三原山の左端（剣ガ峰付近）のズームアップ写真：水蒸気の噴出が見えます

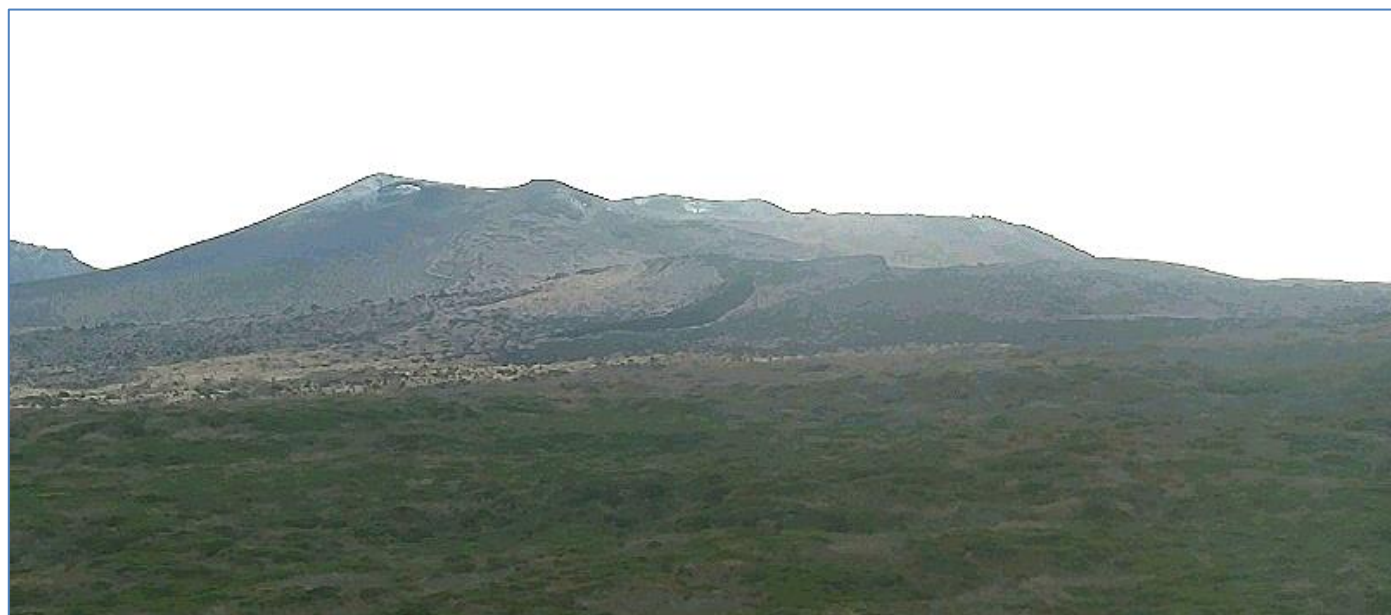


図 9 大島温泉ホテルから見た三原山（内輪山）：トップ左端近傍に白い水蒸気の噴出が見えます

図9は、宿泊した大島温泉ホテルから見た三原山です。曇天であり今一つ彩に欠けますが歩いて行ってみたい風景です。翌朝、図6の温泉ホテルコース（約3.2km、下り約55分、上り??）を逆に進んで行くことにしました。曇天でしたが、出発。ホテル建物横の「つつじ園」への車道（舗装なし）経由になります。最初の数10mは、少し急な下り坂です。10分程度歩けば、後は平坦な黒い噴石（?）の一本道です。道の両側は青葉の付いた低木の密林で、道に木枝が覆いかぶさりトンネルのようになっています。キョンが道を横切るのを見たのはこの1本道でした。

これまでは図4のような観光マップしか見ておらず、図6のハイキング地図を見るまでは、大島温泉ホテルが外輪山の上に位置していることを認識できていませんでした。つまり、最初の「少し急な下り」は、外輪山からその内側のカルデラ床への下りだったのです。低木の密林（図9写真において手前の樹林帯に対応）を800mほども歩けば途切れて視界が開け、三原山まで見渡せます。溶岩塊も大きくなって図10&11のような風景になりました。天候が悪く、時折、ゴマ粒大のアラレが降ってきます。寒いのですが風が無いので、そのまま進むことにしました。



図10 温泉ホテルコース



図11 振り返って温泉ホテル

テキサスコースとの合流地点（図 6 参照）を少し過ぎると内輪山の横裾近くに到達します。道はそこから右直角方向に徐々に折れて内輪山の縁に向かい、同時に道が少しずつ急になって登っていきます。テキサスコースから入ってきた四輪駆動車の新しいタイヤ跡とともに黒い礫道をゆっくり上ります。内輪山の縁手前 300m 辺りから相棒が次第に遅れ気味となりました。話し合いの結果、私は単独で火口一周コースとの合流地点まで行き、そこから引き返すことに。一方、相棒はゆっくりと登ってくるが、無理と判断した地点で引き返すことに。そして、私が内輪山の縁（火口一周コースとの合流地点）に到達して見た風景が、図 12 です。図 8 のズームアップ版に似ていますが、水蒸気は内輪山の内側壁面から噴出していることが良く分かります。火口孔は、ここからは残念ながら見えません。

合流地点を少し回った少し平らな場所に、四輪駆動車が止まっているのを見つけました。その少し手前に太陽電池パネルを付けた観測機があり、その横で 2 人の作業員がしゃがみ込んで何か保守点検をしているようでした。道上にずっと続いていたタイヤ跡を納得することができました。火山のすごさを見せつける風景を数分楽しんだ後、直ぐに温泉ホテルコースを戻りました。相棒と別れた地点まで戻るも相棒の姿は既に無く、もはや下り中と判断。見晴らしが良い地点まで戻り、その戻り道先を目で追っていくと内輪山の裾近傍をゆっくりと下りている相棒を発見（図 13 参照）。その後、合流して大島温泉ホテルに戻りました。途中、雨雲が下りてきて三原山がだんだん隠れ、そして小雨に。ラッキーでした。



図 12 温泉ホテルコースと火口一周コースとの合流地点近くから見た内輪山内壁から噴出する水蒸気



図 13 温泉ホテルコース：
内輪山の裾付近

三原山の写真から伊豆大島は黒い溶岩の島であることが分かります。伊豆諸島(Ref.4, 5)には、白い溶岩でできた島もあるそうです。黒い溶岩は主として玄武岩で、白い溶岩は主として流紋岩だそうです。大別して黒い溶岩の島は、大島、利島、三宅島、御蔵島、八丈島であり、一方、白い溶岩の島は、新島、式根島、神津島だとか(Ref.6)。海岸の砂浜も黒かったり、白かったりするの面白いものです。専門家であるMHさんの岩石の講義をもっとまじめに聞いておくべきでした。

Ref.4:「伊豆七島」は、江戸時代、伊豆諸島の主な有人島が、伊豆大島・利島・新島・神津島・三宅島・御蔵島・八丈島の7島であったことに由来する呼称です。この呼称は7島以外の島民にとっては差別的なものであり、最近では「東京諸島」や「伊豆諸島」に置き換えられています。しかし、各社旅行パンフレットでは、今なおこの呼称が使われています。(from ウィキペディア:伊豆七島)

Ref.5: 伊豆七島と伊豆諸島 (<http://deirahon.com/sub/KAZ/KA04.html>)

Ref.6: 伊豆諸島の島々～白い砂と黒い砂～

(<http://www.env.go.jp/park/fujihakone/intro/files/131016aj.pdf>)

5. 椿まつり

島の中の何処にでも自生の椿があります。そのなかでも大島公園は総面積 327ha の広大な公園(都立)で、椿が生い茂る植物園(椿園を含む)と動物園があります。いずれの入園も無料です。タイワンザルやタイワンリスが逃げ出して野生化したという動物園は、ここの動物園です。公園を入った所に、椿祭りでの歓迎の舞台があり、“大島民謡”、“あんこの手踊り”、“アンコ椿は恋の花”などの踊りが迎えてくれました(図 14 参照)。踊り子は、島に長く住むベテラン有志で、毎日交代しているそうです。



図 14 大島公園 椿まつり

今回は、椿園のみを楽しみました。椿園は、7ha（東京ドームの 1.5 倍）の広い園内に園芸品種約 450 種 3,700 本、自生種のヤブツバキ約 5,000 本の花が咲く国内最大規模だそうです。この時期は、3-4 割咲きでしたが、花や種類の多さに驚きました。椿園内の展示温室には珍しい黄色い椿「金花茶（きんかちゃ）」などがありました（図 15 参照）。

もう一つの椿園は、「椿花ガーデン」です。ここは、入園料（大人 830 円）が必要です。生憎、曇り/小雨となり、客は私たちだけで大歓迎されました。時間を気にすることなく、ゆったりと探索できました。中にゴーカートのコースも設けられているのですが、今は客がいません。受付のお勧めもあってこのコースに入り込んで進み、その両側の椿も楽しみました。ローゼフローラの「落下花」を見るのは初めてでとても可憐でした（図 16 参照）。「富士見の丘」からは、曇天のため富士山は残念ながら見えませんでした。アジサイ株もたくさんあり、そのシーズンには多種多様な花で素晴らしいものと思われます。この園は、大島公園の椿園と比べ、手作り施設に趣向が凝らされており、手入れもよく、花にセンスがありました。有料とした上で無料の大島公園の椿園と競業するわけですから、当然な営業努力かもしれません。

大島公園・椿花ガーデン・大島高校（今回未訪）が、2016 年に国際ツバキ協会(ICS)から国際優秀つばき園に認定されています。

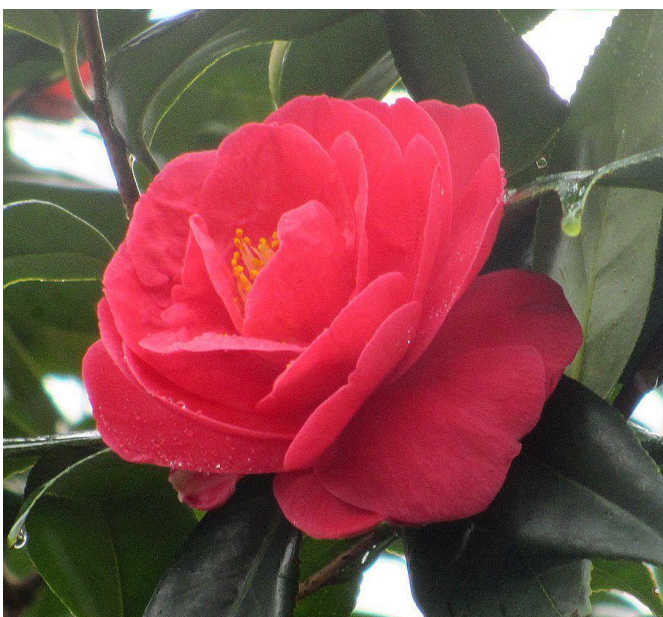
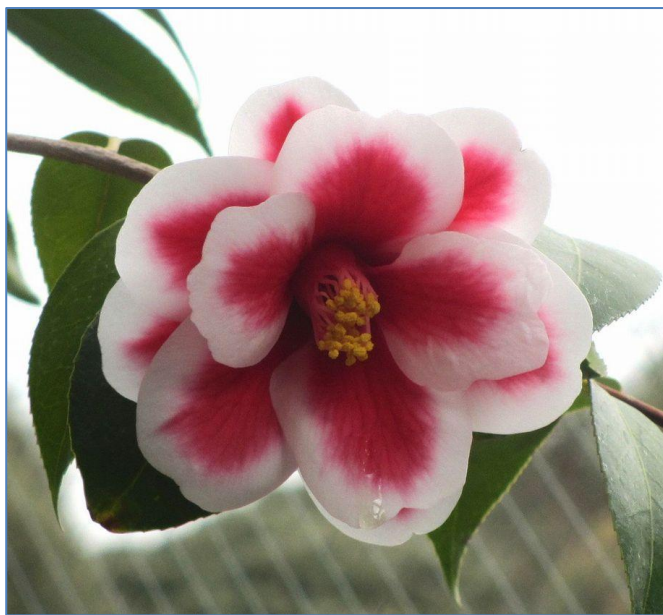


図 15 珍しい黄色い椿
「金花茶（きんかちゃ）」
（大島公園）



図 16 ローゼフローラの落下花
（椿花ガーデン）

以下に、両園の椿花の写真を並べます。



ローゼフローラ

図 17 「大島公園の椿園」と「椿花ガーデン」のツバキ花

大島には、真っ白い花の「大島サクラ」が自生しています。ピンクの桜も見かけますが、これは「河津サクラ」です。椿花ガーデンの出口近くに大島サクラの大きな木が1本あり、他に客もおらず、園内の樹木を世話をしているオジサンから丁寧な説明を受けました。



図 18 河津サクラ

大島サクラは、白い大きな花で、また花と同時に葉が出てくるのが特徴だと

か。よく観ると確におおきな花でしたが、白くておとなしく余り観ていませんでした。

続けて、河津サクラは、大島サクラと緋寒（ひかん）サクラ【別名：寒緋（かんひ）サクラ】との自然交配種であり、また、良く知られているサクラ「染井吉野（そめいよしの）」は、大島サクラをお母さんとして江戸彼岸サクラとのかけ合わせでできたものだったとか。話してくれるオジサンの顔がとても誇らしげでした。帰って、調べてみると確かにそうであり、河津サクラも染井吉野も自然には増殖できなくて、増殖には接ぎ木か挿し木の手法が取られているようです（Ref.7, 8）。

Ref.7：河津桜はやくも満開！河津桜の特徴と開催中の河津桜まつりを紹介します

(<https://ivy-rose-love.com/kawazuzakura/>)

Ref.8：桜の種類 (<http://www.i-nekko.jp/nenchugyoji/ohanami/sakura/>)

更に、大島サクラの葉っぱは、桜餅の葉として使用されており、以前はこの辺りあちこちで人の背丈よりも低い大島サクラを植えたサクラ畑があって、その葉っぱをおばーさんが摘み取っていたのですよと。でも、今は無くなってしまいましたと。今度は、少し寂しげに。

調べてみると、かつては、ヤマザクラの葉も使っていたそうですが、今はほとんどが大島サクラだそうです。その理由は、大島サクラの葉が大きいこと、「クマリン」という芳香物質がヤマザクラの葉よりも多く放出されるために香りがよいことなどでした。ちなみに現在、桜餅に使われている桜葉(Sakuraba)の主な生産地は、伊豆半島の西側にある「松崎町」であり、全国シェア70%を占めているそうです（Ref.9, 10）。

Ref.9：桜餅の葉っぱ (<http://www.geocities.co.jp/Playtown-Dice/9450/sakuha.html>)

Ref.10：「Sakuraba」のふるさと松崎 (<http://www.sakuraba-izumatsuzaki.jp/>)

6. あんこ人形ほか

「観光地のおみやげ」として評判なものに、「あんこ人形」があります。水桶や薪などを頭に載せて運ぶ大島独特の服装の「あんこ（島の娘さん）」で木彫りの彫刻です。昭和初期の大島では、井戸が家々に無かったので湧き水を汲み運ぶ仕事は女性たちの朝夕の日課だったとか。この水桶は、大正期まで、大島土着民の嫁入りには、なた、鎌とともに婚礼道具には欠かせない一品であり、嫁さんは、この桶を頭に載せて朝な夕な両親の住む隠居処に水を補充し、御機嫌奉仕をするという美しい習わしがあったそうです（Ref.11, 12）。頭上に物を載せていては顔を動かすことができない、そこで眼を働かせます。それ故、若い娘達のその眸からは流し目のような情味を感じたという（Ref.13）。今は、時代も変わり、まして平日観光で出会う人は、島外のシニア観光客ばかりでした。流し目の情味を感じさせる眸を持つアンコとの出会いは。もはや無理かと思われま

Ref.11 : <http://fujii-koubou.com/anko/index.html>

Ref.12 : <http://fujii-koubou.com/anko/fujiiyuuji.html>

Ref.13 : <http://ankosan.blog53.fc2.com/category7-1.html>

島内には、合宿免許が取れる自動車学校が2つあります。海と緑の大自然の中で旅行気分を取得できるのが売りになっています。ジェット船の到着港に、迎えのワゴン車が待機していました。島内に信号機は、やはり必要なのです。島内に鉄道は無く、実際の踏切は無いのですが。また、島内では、あちらこちらで土木工事が行われています。2013年（平成25年）10月に接近した台風26号に伴う豪雨による被害の復興、住民生活の更なる安全・安心を確保するためのライフラインの補修・維持の工事、観光振興に向けた公園整備などの工事です。

島の南端にある波浮港（はぶみなと）（図4参照）には、時間が無くなり行けませんでした。波浮港は川端康成の小説「伊豆の踊り子」の舞台となった場所でもあり、そのモデルとなった旅芸人一座は大島で生活している間は港屋旅館で演芸を見せたり、踊り子坂（地元での呼称）を上がった先、甚の丸邸の客の接待に呼ばれたりしたとか。

また、野口雨情の詞「波浮の港」（1928年（昭和3年）レコード発売）があります。昭和初期の大島は、観光とは無縁の離島でした。当時は東京からの船便もなく、雨情は現地には行かず、地図さえも確かめずに詩を書いたようだとか。そのため、歌詞には、伊豆大島にはいない海鷗（ウミウ）（雨情の故郷の磯原にはたくさんいる）が登場したり、東を海に面し西側に山を背負って全く夕日が見えない波浮港に「夕焼け」を見せたりしています。それでも、離れ島のわびしさや、はるばる来た旅人に出船の時は泣いて別れを惜しむ島の娘の素朴な心情が多く日本人の共感をよび、大ヒットになったそうです。インターネットで「波浮の港」を探して聞いてみると、やはり、聞き覚えのあるメロディで懐かしさを覚えるのでした。

三原山は、かつては自殺の名所であったという。1933年1月と2月に実践女学校の生徒が噴火口へ投身自殺。2件とも同じ同級生が自殺に立ち会っていたことがセンセーショナルに報道され、この年だけで129人がここで投身自殺をしました（from Wikipedia 三原山）。この立会人の女生徒の事情が、高橋たか子の小説『誘惑者』の題材となっているそうです（Ref.14, 15）。まだ読んだことはないのですが。

Ref.14 : <https://marrsan.exblog.jp/347430/>

Ref.15 : <http://asita-wadai.com/mihara-1280>

7. おわりに

今回の旅行は、東海汽船が企画した日帰りツアー「椿まつり」にオプションで1泊（2日目はフリー）を付けたものでした。竹芝客船ターミナルでジェット船の予約切符を入手した後、近くの若い女性のツアーガイドさんのところで受付、そして乗船。大島の港で下船して指定の観光バスに乗り込みました。ツアー客は50人ほどで2台のバスに分乗していることを知りました。ただし、ガイドさんは受付時の一人のみ。観光ポイントはランチのホテルを含めて5ヶ所ありました。バス内での観光案内は、ガイドさんが観光ポイント毎に2台のバスを乗り換えて実施。ガイドさんがいない時はバスの運転手さんが案内を実施。ガイドさんが「アンコ椿は恋の花」を歌ったのです。

が、一方のバスでは生歌で、他方ではテープでと同期実施。ガイドさんと運転手さん、いつでも笑顔で無駄時間の無い接客・観光案内と、休みなく気配りを効かせた仕事をされていたことに感謝・感心を致しました。

出港地となった元町港で遅めのランチを取ることに。入った海鮮料理屋は、ほぼ満席状態。隣のカウンターで学生風の一人が食べ終えた後、片づけにこられた女将さんが、「“くさや”を食べられたのですが、臭くはなかったですか？ 残すかと思ったのですがよく食べられましたネ！！」と私たちに。

海、港、船、島、火山、火口、きれいな花、……は、気分を何故か高揚させるのです。出港時には、若いアンコさんが見送ってくれました。



図17 出港時に見送ってくれたアンコさん